

学び・遊び・喜び



日本病院薬剤師会理事
千葉大学医学部附属病院薬剤部長
石井伊都子 Itsuko ISHII

「人はなぜ学ぶのか」という問いは古今東西至る所で論じられている。かの有名な吉田松陰は「人はなぜ学ぶのか 知識を得るためでも職を得るためでも出世のためでもない。人にものを教えるためでも人から尊敬されるためでもない。己を磨くために学ぶのだ。」とおっしゃっているが、凡人の自分はそれだけでは困ってしまう。己を磨けば、他者や社会に還元できるとなれば、少しは納得できるが、ストレス先行の根性論のようで今風ではない。

心理学者であるRaymond Cattellは、人の知能を結晶性知能と流動性知能の2つに分類した。結晶性知能とは過去に受けた教育や社会生活など獲得した知識を活用して問題を解決する能力をさし、言葉の分析、単語力、語学能力などがこれに当たる。一方、流動性知能とは新しい環境に適用するための問題解決能力であり、情報処理、推論、思考、記憶、計算などの能力が分類されている。厄介なのは、この2つの知能はそれぞれが補完しながら発展することである。薬剤師教育でいうならば、二人の薬剤師が全く同じ経験を積んだとすると、個の流動性知能の高いほうが結晶性知能は高くなる。しかし、結晶性知能は勤務先の質が良くないと発達しない。個の能力と環境の質は切っても切れない関係にあることは想像に難くないし、卒前の学部教育にも十分に当てはまる。では、それをどうやって職場環境や教育環境に落とし込んでいくのか。

薬剤師ライセンスをすでに取得している場合は、一定の学力が担保されている。しかし、自己研鑽を辞めてしまうとたちまち過去の存在になってしまうのが現在の医療現場である。私の理想は、「学び」と「遊び」の区別が付いていないことである。医療人として薬剤師として求められる知識・技能・態度を苦なく吸収し、遺憾なく発揮できることが望ましい。好きこそものの上手なれとはよく言ったもので、薬剤師という仕事を薬剤師自身が好きになってほしい。人は好きなことつまり「遊び」については自然に知識を求める。これが「学び」である。何でも良いから薬剤師について追求してほしい。追求すれば、当然、課題という壁が生じる。課題解決のために、また学ぶ。その結果、解決できれば「喜び」が沸き起こる。このようなサイクルを回せる薬剤師は、流動性知能と結晶性知能が共に高まり、職場環境も同時に向上していくのではないだろうか。

このところ、働き方改革が進められている。休憩も休暇もとらず、心身に支障を来すような働き方はもちろん避けるべきである。そのためか、最近、北欧の生活や働き方の書籍を見かける。彼らが残業をしないことや長期休暇が取得しやすいことばかりが目につくが、よく読むと業務が達成できない場合には簡単に解雇され、失業率は非常に高い。彼らは業務を時間内に切り上げるための工夫を徹底し、育休などの長期休暇に興味ある分野の修士号を取得するなど学びの場を求め続けている。彼らは充実したプライベートと充実した仕事は人生の両輪であることを熟知している。ストイックに頑張る印象が強く、その結果を人生の喜びに変換しているように感じる。

学び ⇨ 遊び → 喜び、私はそんな病院薬剤師を目指したい。